

着物の着装に関する新たな概念について —女子大学生を対象とした調査より—

A Study on the New Concept of Kimono Wearing :
Focusing on Survey of Women's University Students

田中 淑江、高橋 由子
Yoshie TANAKA, Yuko TAKAHASHI

1. はじめに

着物は日本の伝統文化を継承する、格式高く、通過儀礼などの特別な機会に着用する衣服として位置づけられている。その通過儀礼で着物を装う場合、細かな決まりごとに従う慣習がある。そのため着物は難しい衣服であると認識させ、気軽に着用することから遠ざける要因の一つとなっている。しかし、着物はフォーマルな装いばかりではなく、日常生活に普段着として着用することも可能な衣服である。すでに呉服業界でも主流のフォーマル路線に加え、カジュアル路線やアウトドア路線を展開する企業が存在する¹⁾。また、観光地で展開される着物レンタルは、着物を気軽に着用でき、非日常を楽しめることから若者の間で利用されている。この着物レンタルにも伝統的な装いと、和洋折衷な装いを提案する業者も存在し、若者の支持を得ているようである²⁾。

このような、従来の伝統的な着物の概念とは異なる新しい着物の装いが、若者を中心に受け入れられていることは、先行研究でも明らかである³⁾。筆者らは、共同研究者である宮武らと共に、2014年より女子大学生の卒業式に見る袴の装いを調査分析してきた。卒業式は人生の通過儀礼であり、フォーマルな装いの場である。しかし、学生は袴姿を従来の伝統的な着物の概念とは異なる、個性を表現するファッションとして捉えていることが明らかとなった⁴⁾。また、

2015年より本学家政学部被服学科の課外授業として、共同研究者とともに着物実践教育の一環で、着物のスタイリングショーを継続してきた。ここでは着物を伝統的な装いだけでなく、自由な発想で装うことを提案した。この実践教育は、学生にとって着物の多様性を学ぶ場となり、着物を着てみたいと思う好意的な結果へと導いた。

しかし、この着物の着装に関する新しい概念は、まだ具体化されていない。そこで本研究では女子大学生を対象に、着物の装いに関する新しい概念をどのように捉えているのかを、定量的及び定性的に調査分析する。研究方法としては、本学家政学部被服学科の学生に着物に関する着装の意識調査を行い、さらに学生が自ら伝統的な装いと自由な発想の装いの着装実践を試みる。この試みは、学生が主体的に実践教育に取り組むことで、積極的に着物の装いについて考えることを目指した。これらの調査、分析から着物の装いに関する新しい概念を具体的に導き出し、今後の着物の装いの可能性について考察することを目的とする。

2. 女子大学生が考える着物の装いについて

2-1. 女子大学生の着物の装いに関するアンケートの内容

アンケート調査は内容の異なるアンケート2種類を、本学家政学部被服学科に所属する18歳から22歳の女子大学生を対象に2回行った。1

回目は自記式質問紙によるアンケート調査を2019年7月～8月にかけて実施した。回答者数235名、回答率95%であった。2回目はオンライン (Google Forms) によるアンケート調査を2020年7月～12月にかけて実施した。回答者数206名、回答率91%であった。

アンケート内容は、着物に対するイメージや興味、着用経験、購買意識、着物の着付け、着物の装いなど多岐にわたる。各項目の評価には4件法、択一式、複数回答、自由記述を用い、単純集計により結果を導き出した。本研究ではこれらのアンケート結果から特に1. 着物と浴衣の着用について、2. 着物の装い方についての結果を用いて、女子大学生の着物の装いに対する考えや行動などについて分析を行った。

2-2. 結果・考察

2-2-1. 着物と浴衣の着用について

着物を着用することについての意識や行動を明確化するため、着物と浴衣に分けて調査した。

着物を着てみたいかの問いに「とても着てみたい」「着てみたい」が94%を占めた。続いて、着物を着用したことがあるかの問いに90%の学生が着用したことがあると答え、いつ着用したかの問いには「七五三」、「成人式」、「お出かけ」であり (図1)、着物を着用した理由は「儀式に着物が相応しいから」、「着たかったから」、「着物が可愛いから」であった (図2)。以上から、多くの学生が儀式において着物を着装したことが示され、その場に相応しいと判断すれば着物を着用することが示唆された。

一方、浴衣の着用経験の問いでは、ほとんどの学生が着用したことがあると答え、着用機会は「花火大会」「夏祭り」などのイベントが主流である (図3)。ひと夏 (6月～9月頃) の浴衣の着用頻度は1～3回が約90%を占め、着用理由は「浴衣が可愛いから」、「浴衣が夏に相応しいから」、「着たかったから」の順であった (図4)。最後に、今後着物や浴衣を着てみたいと思いますかの問いには、どちらに対しても

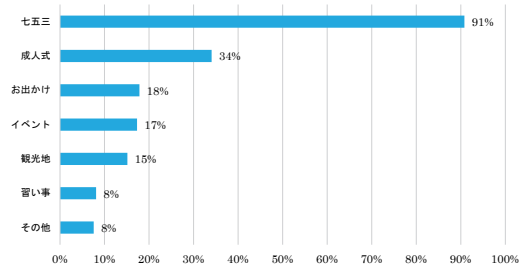


図1 いつ着物を着用したか

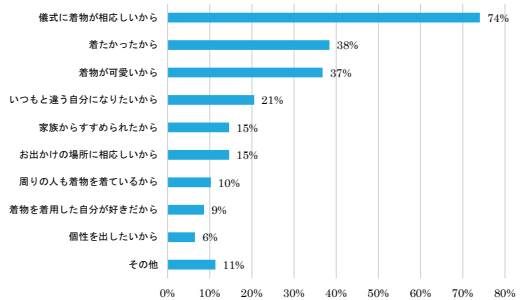


図2 着物を着用した理由について

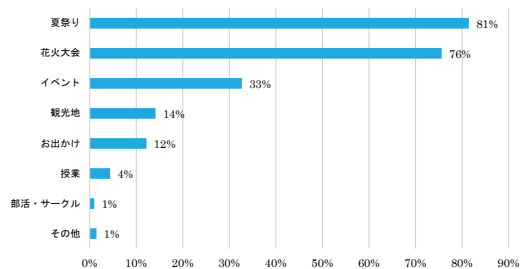


図3 浴衣の着用機会

着物の着装に関する新たな概念について

99%の学生が「とても着てみたい」「着てみたい」と回答し、両者の着用を望んでいることが明らかとなった。また、どのような場所や場面で着てみたいかの問いに、着物は45%の学生が「観光地やイベントなどのお出かけに着てみたい」、40%が「人生の通過儀礼」と続き、浴衣は「観光地やイベントのお出かけに着てみたい」が73%であった（図5）。女子大学生が着物を人生の通過儀礼だけでなく、浴衣と同じように普段着にも着てみたいという意思が読み取れる。学生にとって着物は、浴衣よりハードルが高いが、着る機会があれば着てみたい、前向きに捉えることのできる衣服であることが明らかとなった。

2-2-2. 着物の装い方について

ここでは、女子大学生が日常の着物の装いを自由な発想でコーディネートすることに対し、どのように捉えているかを具体化することが目的である。まず言葉の定義であるが、「伝統的な装い」とは和小物（草履、足袋、帯揚げ、帯締めなど）のみでコーディネートをした一般的な装いのことである。「自由な発想の装い」とは、洋服のコーディネートに使用しているアイテム（ブラウス・タートルといったインナー類など）や小物（靴、ベルト、帽子など）を使用した装いのことである。以下アンケート項目を4つに分けて結果を述べる。

(1)自由な発想の装いに対する考え

自由な発想の装いの写真を提示し（表1）、このような装いについてどう思うか自由記述で回答を得た。

全体の傾向として、約9割の学生から自由な発想の装いを、肯定的に受容する回答を得た。例えば「着物がより身近に感じられるようになると思う」、「とても個人的でおしゃれの幅が広がる」、「自分が持っている洋服やアクセサリーも活用できるので、非常に魅力を感じた」、「着物はフォーマルなものと認識されているので、洋服のようにコーディネートを楽しめる衣服ということを多くの人を知る

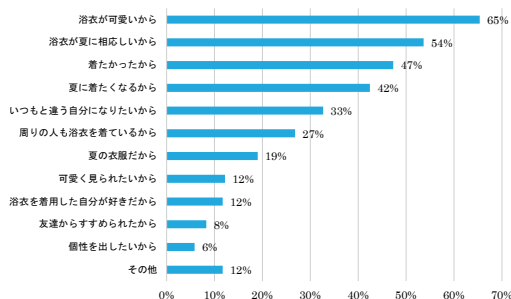
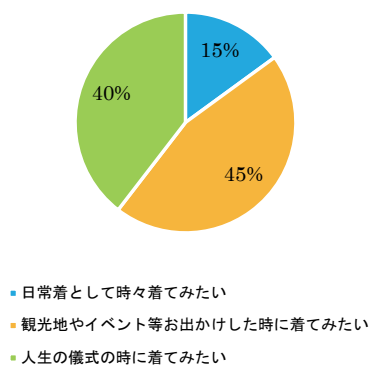
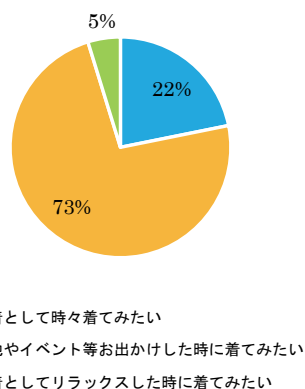


図4 浴衣の着用理由



着物



浴衣

図5 どのような場所や場面で着てみたいか

表1 アンケートで提示した自由な発想の装いの写真

ベルトや靴でコーディネートした例	タートルやイヤリングでコーディネートした例	ブラウスや靴でコーディネートした例	ベレー帽やバンブースでコーディネートした例	レースの帯とパールの小物でコーディネートした例	ベレー帽やサンダル、ベルト等でコーディネートした例
					

べきだと思う」などの記述が見られた。参考までに自由記述の単語を抜き出して数値化し、自由な発想の装いに対する傾向を図6に示した。

一方、自由な発想の装いを否定的、または取り入れることに積極的でない回答も少数見られた。例えば「あまり好きではない」、「伝統的な着装が好きの方にどう思われるかわからないので、実際に着るのは不安」、「難易度が高く、街中を歩くには少し勇気が必要だと思う」、「日本の和服の魅力が伝統的な装いの方が伝わりやすいと思った」などである。

以上から自由な発想の装いについては、全体に受容される傾向が示された。しかし、保守的な学生にとっては、他者からの視線や指摘などの影響から、受け入れることに時間がかかると推察できる。

(2)自由な発想の装いに対する受容の内容

自由な発想の装いに対する受容の内容を具体的に調査するため、3件法（「受け入れられるし、自分でも試したい」「受け入れられるが、自分では試さない」「受け入れられない」）を用いた。なお、参考資料として表2を提示した。

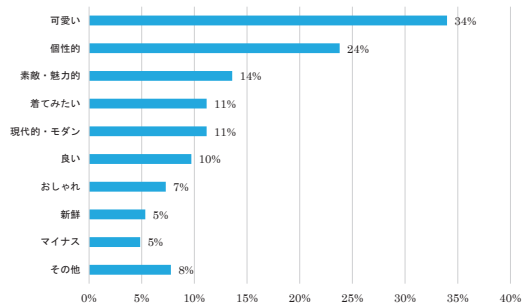


図6 自由な発想の装いに関する自由記述について

表2 参考資料

着物の上にワンピースを着る例	写真左：膝丈ぐらい短く着る着崩した例 写真右：着物の上にワイドパンツを着る例
	

着物の着装に関する新たな概念について

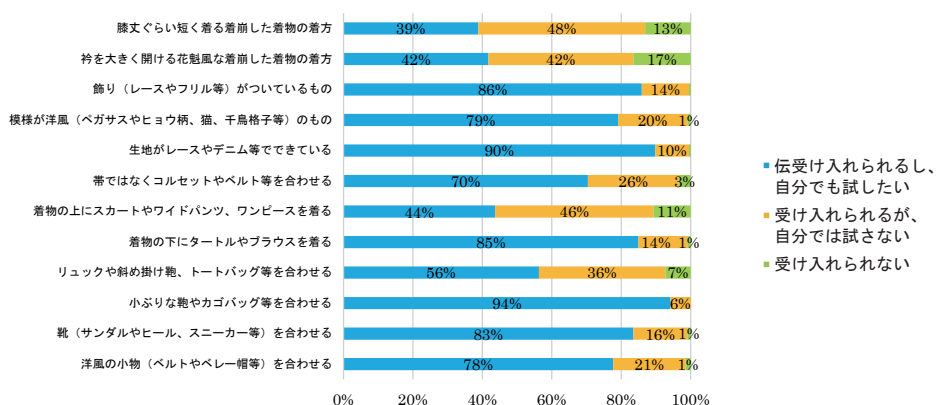


図7 自由な発想の装いについてどう思うか

結果を図7に示した。自由な発想の装いを「受け入れられるし、自分でも試したい」の回答が多い順に項目をみると「小振りな靴や籠バッグなどを合わせる」が94%、「生地がレースやデニムなどで出来ている」は90%、「飾り（レースやフリルなど）がついているもの」が86%であった。

次に自由な発想の装いを「受け入れられるが、自分では試さない」の回答で多い順に「膝丈ぐらい短く着る着崩した着物の着方」が48%、「着物の上にスカートやワイドパンツ、ワンピースを着る」は46%、「衿を大きく開く花魁風な着崩した着物の着方」は42%であった。また「受け入れられない」の回答は、前項で述べた項目と同じであった。

今回提示した全ての自由な発想の装いに対して、受容する傾向が示された。しかし着物を着崩し過ぎると感じる自由な発想の装いに対しては、自身は着ないと考えることが分かった。着物のイメージである上品、美しいなどを活かす範囲での自由な発想の装いが好まれる傾向であることが明らかとなった。

(3)実際に装うことについて

普段着の着物を実際に装うことを想定し、伝統的な装いと自由な発想の装いについてどう思い、どうしたいかを4件法と自由記述で

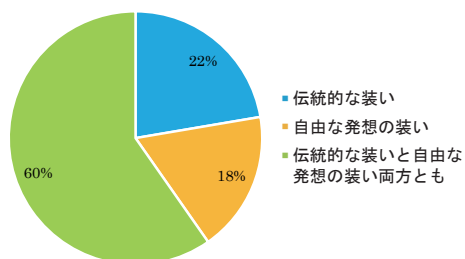


図8 着物を着用する際にどのような装いをしたいか

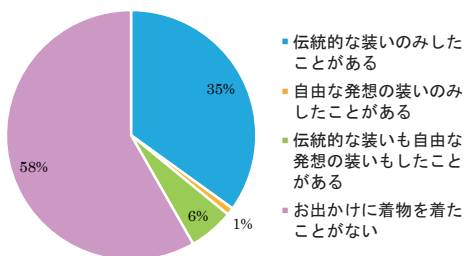


図9 お出かけの際にどのような装いをしたことがあるか

回答を得た。

結果は図8に示したとおりである。「伝統的な装いも自由な発想の装いも両方とも着こなしたい」が主流であったが、2割程度の学生はそれぞれ「伝統的な装いをしたい」と「自由な発想の装いをしたい」と回答した。また、実際に装った経験に対する問では図9に示したように、伝統的な装いが主流であることが



図10 学生の実際の自由な発想の装い

示された。伝統的な装いも自由な発想の装いも両方すると回答した学生は全体の6%、自由な発想の装いだけは1%で、ほとんどの学生は自由な発想の装いは経験がないことが分った。

実際に自由な発想の装いをする学生に、どのようなコーディネートをしたのか自由記述で回答を得た。コーディネートの例は「レースの衿のインナー、帯の代わりにベルト、パンプス、ショルダーバッグ」、「ブラウスとスカートを着物の中に着る、ブーツ、ベルト、ベレー帽」、「裾を少し短くして、着物の下にスカートを着る、ベルト、靴下、ヒール」などである。自由な発想の装いをする学生の使用アイテムを数値化すると、靴は取り入れやすいアイテムのようで件数も多く、内訳はパンプス、サンダル、ブーツなどを用いていた。また着物の下に着用するインナーもブラウスやレースを好んで使用していた。

コーディネートの傾向としては、着物の着用方法は伝統的着方に則り、崩して着ることはなく、洋服はさりげなく着物の内側に取り入れていた。また小物も特別なアイテムでは

なく、日常の洋服に用いているものを、自由な発想の装いにポイントとして用いていた。草履は着物の重厚感や特別感が出てしまうので履かず、日常の履物類を取り入れていた。これにより、動きやすく軽快で気軽な装いの傾向を示した。

(4)学生による自由な発想の装いの現状

(3)で自由な発想の装いについて実際に行っていると回答した学生5名を対象に、インタビュー調査を実施した。調査は2021年9月に行い、主な調査項目は①着物に興味を持ったきっかけ②自由な発想の装いに興味を持ったきっかけ③自由な発想の装いの発想方法について④自由な発想の装いを着用していく場所や人について⑤自由な発想の装いの魅力についてである。

インタビュー調査の結果について、表3にまとめた。また、図10はインタビュー調査に応じた学生が、実際に自由な発想の装いを行っている写真である。

①着物に興味を持ったきっかけについては、幼い頃から着物に触れあう機会が多かったことや、身近にいる家族が着物を着用した

着物の着装に関する新たな概念について

表3 インタビュー結果について

	A	B	C	D	E
① 着物に興味を持ったきっかけ	幼い頃から花火大会などで浴衣を着用する機会があり、着物が身近にあったから。	<ul style="list-style-type: none"> 幼い頃からお祭りへ行く時に浴衣を着用して、着物が身近にあった。 幼い頃、家族のダンスを見るのが好きで、そこで着物に触れたこと。 母が茶道、祖母が蚕、曾祖母が和裁士と、家族が着物に関係する仕事をしており、その話をよく聞いたことから。 	高校3年生の時に姉の振袖姿を見て、素敵だと思ったことから。さらに、当時の授業で課外に、当時の授業で着物について調べ、より興味をもった。	幼い頃からお祭りへ行く時に着用しており、着物が身近にあったから。	<ul style="list-style-type: none"> 高校生の頃、体育祭の応援団で和風の衣装を制作したことから。 大学のオープンキャンパスで、着物の講義を受けたことから。
② 自由な発想の装いに興味を持ったきっかけ	浴衣や着物を着用する際に、着付の小物が一変するのを見て、それが大変で、すでに持っている小物で代用できないか考えたことから興味を持った。また、SNS (Instagram) でコーディネートを検索することが好きで、そこから自由な発想の装いを見たことも大きい。	高校生の頃に、SNS (Twitter) でたまたま着物にシャツをコーディネートした姿を見つけたことから。	姉の振袖に合わせる髪飾りを一緒に探しているうちに、着物の着付け、コーディネートが思い浮かんだことから。	高校生の頃、お茶屋さんでアルバイトをしており、そこで着物にブーツを履いてみたりと言われたことがきっかけ。さらに、その仲間と着物にどんな小物が合うか話すことで、さらに興味を沸かした。	大学生の頃、SNS (Instagram, Twitter) でたまたま自由な発想の装いを見たことから。
③ 自由な発想の装いの発想法について	その日に着用したいメインカラーを1色決めて、そこからコーディネートの際に、着物と洋服で差はなく、自分が可愛いと思える状態にする。	<ul style="list-style-type: none"> 洋服をコーディネートする感覚と同じで、まず着物を決めてから小物などをコーディネートしていく。 着用した後の手入れを楽にするため、暑い日に汗がつかないように着物の中にシャツを合わせるなど、気候によってもコーディネートが左右される。 	<ul style="list-style-type: none"> 洋服をコーディネートする感覚と同じ感覚で着物もコーディネートする。 着物と帯が同じぐらい好きで、着物には必ず帯を使用する。 コーディネートは自分がお洒落だと思えるようにする。 	洋服をコーディネートする感覚と同じ感覚で着物もコーディネートしている。	洋服をコーディネートする感覚とは違い、着物がいかに可愛く見えるかをメインに、合わせる洋服はシルエットを基準にコーディネートする。
④ 自由な発想の装いを着用していく場所や人	<ul style="list-style-type: none"> 友人と一緒に着用したり、自分1人でも着用する。(友人が洋服でも自分が着物を着用することもある) 着用したいと思った時に着用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 友人と一緒に着用したり、自分1人でも着用する。(友人が洋服でも自分が着物を着用することもある) 自分の好きな場所、例えば本屋さんなどへ着て行く。 	<ul style="list-style-type: none"> 友人や家族と一緒に着用したり、自分1人でも着用する。(友人が洋服の場合は自分も洋服) 最近は美術館へ着用していくことが多いが、自分が着たいと思えばどこへでも着て行く。 	<ul style="list-style-type: none"> 友人と一緒に着用したり、自分1人でも着用する。(友人が洋服の場合は、自分も洋服) 少し気取って歩きたい表参道などのお洒落な街へ着て行く。 	<ul style="list-style-type: none"> 家族や友人と一緒に着用している。まだ1人では着用しませんが、近々着用する予定。
⑤ 自由な発想の装いの魅力について	<ul style="list-style-type: none"> 元々、目立ちたい訳ではないが、人と違う恰好がしたいというこだわりがある人からどう思われるかよりも、自分が1番可愛い状態でその日を過ごせるのが大切。 着物は普段着よりも特別感があり、何でもない日に特別なものを着ることで、特別な日になる。 着用する日までにコーディネートして準備している時間が、とても楽しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 着物のコーディネートに洋服をコーディネートすることで、着物がカジュアルダウンし、着用しやすくなる。 自由な発想の装いはルールなどに縛られないため、着用しやすい。 着物がとても好きで、伝統的な装いと自由な発想の装いどちらも着用する。2つのも良いとこどりをしたい。 	シンプルに自分が可愛く、お洒落だと思えるものだから。	<ul style="list-style-type: none"> 自由な発想の装いをする中で、モダンでお洒落に見えて、カッコいいと思うから。 人の目を引いて、素敵だと思われるようなコーディネートができる。 特別感がある。 	伝統的な装いよりもハードルが低く、可愛くお洒落に見えるところ。

ことから興味を持ったことが分かった。着物に興味を持つことは、幼い頃の経験や身近な家族が着物と関わっていることが関係していることが示された。

②自由な発想の装いに興味を持ったきっかけについては、SNSなどで実際に自由な発想の装いを見たことが挙げられる。つまり、まずは自由な発想の装いを知ることが重要である。

③自由な発想の装いの発想方法については、多くの学生が洋服をコーディネートする感覚と同じであると証言した。このことから、自由な発想の装いを受容している学生にとっては、着物が特別なフォーマルな衣服ではなく、普段から着用している洋服と差がない存在となっている。

④自由な発想の装いを着用していく場所や人については、特定の場所に限らず、何処へでも着用していくことや、1人で外出する際に着用していることが示された。このことから、着物を特別な時に着用するのではなく、日常に着用できる衣服の1つとして捉えていることが明らかとなった。ただし、友人と外出する際には着物の着用を遠慮する学生もおり、着物を着用することで人の目を引くことに対し、他者へ配慮していることが分かった。着用者が少ないため人の目を引いてしまうことを、マイナスだと感じる人に対して、どのようなアプローチができるかを検討する必要があるだろう。

⑤自由な発想の装いの魅力については、自らが可愛くお洒落だと思って着用しており、このように受け止めることが自由な発想の装いに繋がることが示された。

以上から2章をまとめると、女子大学生は自由な発想の装いに対して好意的に受容し、理解していることが明確になった。また、実際に装うとしたら伝統的な装いを選択し、自由な発想の装いを積極的に取り入れる行動には至っていないことが示された。この背景にはコーディネートの仕方が分からない、コー

ディネートが難しい、人の目が気になる、伝統的な装いの方が身近で継承したいなどの考えが推察される。したがって、自由な発想の装いは一部の学生には取り入れられているが、多くの学生には浸透していないことが明らかとなった。

3. 伝統的な装いと自由な発想の装いの実践的取り組み

3-1. 着装実践の取り組みについて

本学家政学部被服学科の専門教育科目「伝統和服制作実習Ⅰ」において、学生が自ら制作した浴衣を用いて、伝統的な装いと自由な発想の装いの着装実践を行い、装いについての取り組みや意識を分析することを目的とした。

調査対象は「伝統和服制作実習Ⅰ」を履修していた44名である。「伝統和服制作実習Ⅰ」は2年生対象の授業であり、1年生で「被服造形基礎実習」を修得した学生が履修する科目である。「被服造形基礎実習」の最終回に伝統的な着付けを学び、「伝統和服制作実習Ⅰ」全14回のうち、13・14回に自ら制作した浴衣で着付けを学ぶカリキュラムとしている。13回目に伝統的な着付けの着装を行い、14回目に自由な発想の装いを各自が検討し、着装を行った。その後、この取り組みについてのレポートを提出させた。レポートの内容は以下の通りである。

- 1) 自由な発想の装いのコーディネートのテーマ
- 2) 自由な発想の装いの写真（正面・背面・その他部分拡大など）
- 3) 工夫した点、難しかった点、アピールポイントなど
- 4) 伝統的な装いと自由な発想の装いについての考察
- 5) それぞれの装いに取り組んだ感想
- 6) その他（さらにコーディネート考えた場合など）

3-2. 結果・考察

3-2-1. 写真分析について

自由な発想の装いがテーマであるレポートの



図11 伝統的な装いに酷似したコーディネート



図12 浴衣の上からスカートやパンツを重ね着するコーディネート例



図13 浴衣の下にスカートを着装するコーディネート例

写真を分析したところ、大きく2つに分類することができた。伝統的な装いに酷似したコーディネートは59%（図11）、伝統的な装いと相違したコーディネートは41%となった。後者は例えば、浴衣の上からスカートやパンツを重ね着するコーディネートや（図12）、浴衣の下にスカートを着装するコーディネート（図13）がみられた。2章のアンケート結果では、女子大学生は伝統的な装いも自由な発想の装いも受容する傾向を示した。しかし、実際に自身が着装する場合は、伝統的な装いに則る傾向となった。

自由な発想の装いに用いられた日常に身につけている小物の使用頻度順は、着物の内側に着用するインナーとして、ブラウス類が28件、ベ

ルトが16件、靴下が15件、ブーツ類が14件、靴が14件であった。つまり、日常に身に付けている小物をそのままコーディネートに取り入れていることが示された。

以上の傾向から、女子大学生は自由な発想の装いに興味はあるが、実際に自身が装う場合は、伝統的な装いを基本としていた。また、学生にとって自由な発想の装いとは、伝統的な装いに日常的に身につけている小物をアクセントとして取り入れることであることが示された。この結果は、2章2-2-2. (3)で取り挙げた、既に着物の着装に自由な発想の装いを取り入れている学生のコーディネートと類似しているため、女子大学生が嗜好する傾向だと考察できる。

3-2-2. レポートの感想について

伝統的な装いと自由な発想の装いをどちらも着装実践したことで、着物を装うことについてのどのように考えたのかをレポートより分析する。

まず伝統的な装いに対しては、半数近くの学生から和服が本来持つ上品さ、美しさを生かす装いの大切さを学んだという意見を得た。また、同じ浴衣や帯でも、帯結びに変化をつけて個性が表現できることに気づきがあったことが示された。マイナスの意見も全体の4分の1に見られ、動きにくい、堅苦しい、着姿に皺がないか、帯結びが整っているか、綺麗に着ることに神経を使うなどの意見であった。

自由な発想の装いでは、半数以上の学生がコーディネートが多様性に気づき、小物の取り合わせや色使い、着物の丈などを工夫することで、独自の装いが出来ることに理解を示した。また、日常に身につけている小物を用いてコーディネートすることは、着物が身近になるきっかけとなっていた。さらに自由な発想の装いでは、動きにくさの改善や堅苦しい着付けからの解放が期待でき、着物が多くの人にとって気軽に着用できる衣服となる可能性を示唆した。ただし、この装いの注意点として「本来の着物の良さを失わないために、コーディネートを慎重に行うことの必要性」や「最低限の伝統的な装いのルールを守ることが重要」といった意見も見られ、伝統的な装いを継承する大切さに気が付いたようである。また、「状況によって装いを使い分けることで、着物の装いが楽しめる。バランスよく取り入れることが重要」と述べていた。

両者の装いを経験することは、女子大学生が着物を着ることについて改めて考える機会になったことが示された。自由な発想の装いに機能性や可能性を見出す一方で、伝統的な装いも排除することなく、状況により着分けることが重要であると考えられる。伝統的な装いは、着付けやコーディネートの細かなルールが嫌煙される要因の1つである。しかし、伝統的な装いは着物の基本であり、マイナス面も含めて着物を理

解することで、自由な発想の装いに発展すると考えられる。このことに、一部の学生はすでに気が付いていることが示唆された。伝統的な装いだけでなく自由な発想の装いを取り入れることは、着物の普及に寄与すると共に、着物を次世代に継承するために必要であると考察できる。

4. 自由な発想の装いの可能性について

4-1. 自由な発想の装いを浸透させるための分析方法について

これまで述べてきた自由な発想の装いは、伝統的な装いには使用しない、日常的に身につけている小物を用いてコーディネートを行う、着物の装いの新しい概念である。この新しい概念について、アンケートやインタビューから女子大学生は好意的に捉えていることが示された。このことから、着物の装いの新しい概念を人々に浸透させることは、着物を次世代へ継承するために有効な提案の一つではないか、今後、この新しい概念は着物を装う文化へ影響を与え、社会に変化をもたらす可能性があるのではないかと考える。このように着物の装いの新しい概念を捉えれば、経済活動におけるイノベーションに相当するのではないかと推察できる。イノベーションとは、「経済活動に関係する新しい活動のこと」⁵⁾などを指し、画期的な商品やサービスが普及することで、経済的、文化的に社会が変化することも、イノベーションと呼べる^{6,7)}。

このイノベーションの普及についてRogers (1962) は、イノベーションの普及過程理論と提言している⁸⁾。この理論は、採用の早い順からイノベーター(革新者)、オピニオンリーダー(初期採用者)、アーリー・マジョリティ(初期多数派)、レイト・マジョリティ(後期多数派)、ラガード(遅行者)の5つに分類される。以下で取り上げる2つのカテゴリーについて述べると、イノベーターはイノベーションを社会システムへ流す、門番のような役割である。オピニオンリーダーは、他のカテゴリーへ与える影響が高く、イノベーションを採用して周囲へ伝え

る役割がある⁹⁾。この理論に、着物の装いの新しい概念を当てはめることは難しい試みではあるが、可能な限り検討し述べたい。

4-2. 自由な発想の装いを浸透させるための分析

社会における着物の装いの新しい概念の出現は、2000年頃からと仮定できる。これは呉服販売店や着物雑誌の創刊などから検討した。例えば「株式会社社やまと」は、1990年頃から新たな戦略で着物市場の改革に取り組み、2004年にカジュアル路線の「なでしこ」、2011年に洋服と着物の垣根を超えた「DOUBLE MAISON」を開始した¹⁰⁾。「株式会社三松」では2016年に和を楽しむカジュアル路線の「ふりふ」を立ち上げている。着物雑誌では2002年に「KIMONO道」が出版され、これまでよりもカジュアルで若い女性に向けて作られた¹¹⁾。以上のように、伝統的な着物のみを扱ってきた呉服販売店がカジュアルな路線を立ち上げたことや、新たな視点で編集された着物雑誌が発売され、呉服業界において動きが見られた。この動きを、社会における着物の装いの新しい概念の、イノベーターとここでは位置付ける。

次に、2-2-2. (4)のインタビュー結果から、学生がSNSを通じて自由な発想の装いの情報を得ていることが示された¹²⁾。学生らが参考しているユーザーの多くは、数年前前から活動しており、このユーザーは社会におけるオピニオンリーダーと位置付けられる。

これまで述べてきたことを踏まえ、本学の現状を検討する。本学では、2015年から取り組んでいる浴衣スタイリングショーに参加した学生や、2-2-2. (4)でインタビュー調査をした学生がオピニオンリーダーと考えられる。特に後者の学生は、着物を自らが着用したい時に着用して出かけ、自由な発想の装いを複数回行っている。このことは着物の装いの新しい概念を受容し、自らの衣生活に取り入れたと言える。

また、着物の装いの新しい概念が、さらに人々へ浸透していくためには、障壁があると考えら

れる。これは「着物を着用しない理由」についてアンケート調査をした結果から明らかである。アンケートの回答は、上位から1.着ていく場所がない、2.動きにくい、3.着付けが出来ない、4.値段が高い、5.着物を持っていない、6.目立ってしまうであった。1～3は自由な発想の装いで解消できることが、今回の着装実践の学生レポートから明らかになっているが、4～6は障壁だと考えられる。着物を持っていない理由の1つに着物の値段が関係し、2-2-2. (4)のインタビューでも着物の着装に必要な小物を揃えることは大変であると回答を得た。さらに、目立ってしまうという回答は集団主義的な意識からであり、目立つことを恐れて着装を拒み、拒むことで着用者が増加しないという構造に陥ってしまうと考察される。このような障壁について鑑みると、Moore (1999) のキャズム理論に当てはめることができるのではないかと考える¹³⁾。キャズムとはカテゴリー間にある深い溝のことを指し、このキャズムを超えることがイノベーションの浸透においては課題であり、オピニオンリーダーとアーリー・マジョリティの間が最も深い溝だとされている¹⁴⁾。本学においてオピニオンリーダーの出現が仮定できたため、次のカテゴリーであるアーリー・マジョリティへ浸透させていくには、このキャズムについて検討する必要があるだろう。これまで述べてきた着物の装いの新しい概念の現状と障壁について、図14に示した。

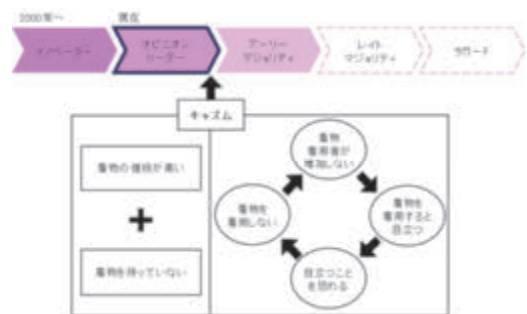


図14 着物の装いの新しい概念の現状と障壁について

4-3. 結果・考察

着物の装いの新しい概念は、女子大学生に好意的に受け止められており、この概念を浸透していくことは着物の継承に寄与すると考えられる。つまり、この概念が浸透することで着物を装う文化へ影響を与え、社会に変化をもたらす可能性があることを鑑みると、着物の装いの新しい概念はイノベーションであると考察できる。このイノベーションの浸透状況から、本学にはオピニオンリーダーが登場したと仮定することができる。今後さらに着物の装いの新しい概念を浸透させるためには、引き続き大学教育の中で伝統的な装いを抑えた上で、自由な発想の装いを学生に紹介することが重要ではないだろうか。さらに、浸透の障壁であるキャズムについて、着物の値段は呉服業界の課題であり、教育においては家族や身の回りの方から譲り受けた着物を紹介することや、比較的安価に購入できる古着店などを示すことに留まるだろう。着物を着用すると目立つという意識については、まずは友人や家族を誘って着用することを提案し、解決の糸口としたい。また、アーリー・マジョリティ以降の動きについては現時点で示すことはできないが、今後の動向に注視して検討をしていきたい。

5. 結論

本研究では、従来の伝統的な着物の概念とは異なる、着物の装いに対する新しい概念、すなわち自由な発想の装いを、女子大学生がどのように捉えているのかを分析した。女子大学生は、自由な発想の装いを好意的に受け止め、着てみたいと考えている。その装いは、伝統的な装いのイメージを維持し、そこから着崩しすぎない着こなしや、日常使いの小物をアクセントとして使用し、着用することを受け止めている。また着物のマイナス点である着付けや動きにくさなどを改善し、さらにかわいく、個性も表現できるので、着物の可能性が広がり、着物を次世代へ継承するための手段の一つとして考えられ

る。すでに自由な発想の装いを実践している学生のインタビューからも、この装いはルールに縛られず、洋服と同じ感覚でコーディネートすることができ、自分がかわいくお洒落になれると述べている。本学の自由な発想の装いのオピニオンリーダーにとって、着物を装う際に新しい概念を取り入れることで着物と洋服に区別はなく、着る衣服として捉えていることが示された。

このように自由な発想の装いからは、従来の難しいとされる着物の装いのイメージではなく、着物の継承に肯定的な影響を与える可能性が見出された。一方、周りの反応が怖くて、装うことができないという意見も見られた。実際に自由な発想の装いを好ましく思わない存在は一定数いるようであるが¹⁵⁾、着物の継承を望むのならば、寛大な態度で着物の変化を受け止めるべきではないかと考える。また、着物のルールに捉われず、着物を普段着用、儀式用と区別する認識を浸透させ、普段着の着物は自由な発想で着装できる環境を作り出す必要があると考える。

今後教育現場では、これまで継承されてきた伝統的な装いを基礎とし、発展的な取り組みとして、自由な発想の装いを取り上げ、両者の装いの共存を試みる。現時点でも筆者の授業「和服文化論」では、伝統的な装いと自由な発想の装いを筆者らが着装し、紹介をしている。学生は両者の装いに興味や理解を示している。特に自由な発想の装いに触れる機会がなかった学生にとっては影響があり、着物を身近に捉えるためのきっかけとなったことが、授業アンケートより示された。

以上のように着物の着装の新しい概念は、女子大学生に受け入れられる傾向を示し、今後着物を継承するための手段の一つとして、重要な新しい概念であることが明らかとなった。

今回のアンケートは、被服学科で着物に関する授業を履修した学生が対象であるので、これが一般的な女子大学生の傾向とは言い難い。更に異なる専門を学ぶ学生を研究対象とすること

で、新しい概念の可能性を明確化し、着物の継承に寄与する研究を継続していきたい。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP19K02338の助成を受けたものです。

注

1) きものの「やまと」は従来のフォーマルに偏った市場に10年ごとに新たな戦略で着物の市場を開拓してきた。1990年にきものの「ファッション化」をめざし、2000年「カジュアル化」、2010年「アパレル化」に取り組んでいる。さらに2018年にはアウトドアメーカー「スノーピークス」とのコラボレーションで「アウトドアシーンで気軽に着られるKIMONO」を展開している。矢島敏孝「着物の森」織研新聞社、2015
https://store.kimono-yamato.com/Page/ytg_outdoor-kimono.aspx 最終閲覧日20210831

2) 例えば「village着物レンタル店」「着物レンタルVasara」などは和洋折衷の着物のレンタルを展開している。
<https://village-official.stores.jp/> 最終閲覧日20210928
<https://vasara-h.co.jp/> 最終閲覧日20210928

3) 学生のアンケートの記述には、自由な発想の着物の装いを実践してショーに参加した学生と、それを見学した学生からは「従来の考え方に囚われない着方を知り、今後着物を着たいと思った」や「洋服を組み合わせる着こなしは和服を広めるような提案だ」など、今後、着物の継承や発展に影響のある意見を収集することが出来た。田中淑江, 高橋由子, 宮武恵子「着物教育の可能性について—被服学における専門分野を超えての試み—」服飾史研究, Vol.3No.1, 2021, 29-40

4) 1990年以前の卒業式の袴姿は、色無地に紺の袴の伝統的な装いであった。近年はレンタル業者の進出や女子大学生をとりまくファッションの環境の変化、学生の和服に関する知識の低下などにより多様な着物を気軽に選べるように

なった。パステルカラーや派手目の小紋やアンティーク着物、振袖などの個性を表現する着物と袴を用いた卒業式のスタイルとなった。

田中淑江, 長谷川紗織, 宮武恵子「現代に見る女子大生の卒業式の袴姿—伝統的着装の変化について—」服飾文化学会誌, VOL.16, No.1, 2015, 1-15

5) 竹岡志朗, 井上祐輔, 高木修一, 高柳直弥「イノベーションの普及過程の可視化—テキストマイニングを用いたクチコミ分析—」株式会社日科連出版, 2016, 2

6) 馬傷正実「ファッションビジネス 戦略的ブランドマネジメント—キャズムを超えて—」株式会社晃洋書房, 2017, 50

7) エベレット・ロジャーズ「イノベーションの普及」株式会社翔泳社, 2007

8) 前掲注6, 49-52頁

9) 他の3つのカテゴリーについても述べると、アーリー・マジョリティは、イノベーションに対して慎重であり、採用まで時間がかかる。レイト・マジョリティは社会における平均的な構成員がイノベーションを採用した直後に、自らも採用する。ラガードはイノベーションを最後に採用する人で、社会の中で孤立していることが多い。

前掲注6, 49-52頁

10) 前掲注1

株式会社やまとは、2004年に20代女性をターゲットとしたカジュアル路線の「なでこ」を設立した。DOUBLE MAISONは「着物と洋服を「身につけるもの」という大きな視点をもって従来のルールに制約されない生きたコーディネートを提案」することを目的としており、レースの素材の着物や、伝統的な模様と異なる模様の着物を商品展開している。

伊藤元重, 矢島孝敏「きものの文化と日本」日経プレミアム, 2016

<https://store.kimono-yamato.com/DefaultBrandTop.aspx?bid=05> 最終閲覧日20210928

11) 「KIMONO道」は祥伝社から出版され、年

に1度発行されてきた。その後「KIMONO姫」と名を変え連載は続き、2019年にはTAC出版より「KIMONOanne.」とリニューアルして発売されている。

「アンティーク&チープにKIMONO道」祥伝社, 2002

12) 学生のインタビューから、SNSの中でも特にInstagramやTwitterから情報を得ているようである。

13) 前掲注6, 56-58頁

14) 前掲注6, 56-58頁

15) 着物の着用歴のある人が他人の着物の着付けやコーディネートに意見することがあり、そのように意見する人を着物警察などという場合がある

片野ゆか「着物の国のはてな」集英社, 2021, 5